

---

# おっぱいをチートさせる男

百合姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おっぱいをチートさせる男

### 【Nコード】

N1936Z

### 【作者名】

百合姫

### 【あらすじ】

注・この物語に下ネタはあまりありません。タイトルで下ネタを警戒した人にはご安心を。期待した人には申し訳ありません。

この物語は二次に良く見られる噛ませ犬として出される性格の悪いオリ主が主人公であり、そんな主人公が改心したけれど前の評判が評判なだけに肩身の狭い思いをする物語です。

(予定では)

いまいちイメージがわかないって人はとりあえず読んで見ると良いと思うよ！

作者が現実逃避としてバカな作品を書きたいと思ったがゆえの投稿です。ゆえにギャグテイスト。シリアスもあまり期待はしないでください。

そして更新速度に過度な期待はしないでください。

なおかつジュエルシード事件のみで完結するかもしれません。

またイベントの時系列が結構変わります。たとえばジュエルシード事件がなのはが9歳ではなく、13歳の時くらいになります。

## ぶろろーぐ(前書き)

始めに言っておきます。

感想などではオブラートに包んでね。

作者は非常に打たれ弱いのです。

ぶろろーぐは三ページ分くらい。

噛ませ犬的勘違い系主人公のアホさ具合をお楽しみください。

まあそんなに量があるわけでもないですけども。

プロローグが終わると勘違いから改心します。

それとおそらく下ネタはあまり無いと思います。今回がピークってくらいかも。

今のところヒロインはいつそのことフェイトの母のプレシアにしてしまおうかとも思っていたりして。

レベル高すぎるかな？

そしてご都合主義は出来るだけ省きたいとは思ってます。期待はしないで欲しいですが。

ぶるるーぐ

おっばい。

ある人は言った。

それは神秘のベールに包まれた神々の宝玉だと。

ある人は言った。

そこに全てを置いてきた。探し出せ、その秘宝を、と。

ある人は言った。

女体最高!!!と。

ある人は言った。

胸とは。胸ではなくおっばいである、と。

ある人は言った。

おっばいを求めずして何を求める？

富か？名誉か？

否!!!

男として生まれたからには至高のおっばいを求めずして何とする。  
と。

ある人は言った。

おっばいに何が詰まってるかだつて？

HAHAHAHA!何を今更なことを。

・・・ふっ。

浪漫が詰まってるのぢ。

ある人は言った。

いや、胸に詰まってるのは脂肪だろ？」と。

ある人は言った。

そういう夢の無い奴は腸をぶちまけて死ね、と。  
はらわた

ある人は言った。

人体の神秘。言い換えるならそれだね。と。

ある人は言った。

あの曲線美。柔らかさ。重量感。すべてにおいてマーベラス、と。

ある人は言った。

芸術はおっぱいだ！と。

ある人は言った。

小さなおっぱいも大きなおっぱいも等しく皆おっぱい。全てのおっぱいを私は愛そう、と。

『本当にそれで良いの？』

「ええ、もちろん。」

『男神じゃない女神の私には分からないけど・・・そんなので良いの？』

「はい。」

『・・・ま、まあ頑張ってる？』

「ありがとうございます。俺、良い嫁さんを探します。」

『別にそんな決意を私に聞かされてもドウ答えば良いか・・・』  
「暗に貴方に嫁になってくれないかな？」

『H A H A H A、無理。貴方みたいな変態、好みじゃないから。』

「し、失敬なつ！！」

揉むにしても決して無理やりには……」

『……はあ。とつとと行って頂戴。気持ち悪いもの。貴方。』

「ふふふふ。これで俺のオリ主ハーレムが……ぐふふふ。」

『本当に気持ち悪い。……じゃあね。』

「はい、本当にありがとございました。」

こうして1人の男。

オリ主でイケメンな彼が異世界でハーレムを作るべく頑張ってみる物語が始まる。

はつきり言おう。

彼のその夢はかなわないだろう。  
なぜならば。

『……勘違い系オリ主つてところかしら。

あんなの好きになる子が居たら……不憫すぎるわ。』

この物語は勘違い系の彼が主人公の物語である。

最近の二次創作には転生オリ主の他にままオリジナル主人公が出てくるが、その中でもヒロインに纏わり付く嫌われ者の勘違い系の噛ませ犬オリ主。

この物語は、その噛ませ犬側の彼から見た物語である。

果たして彼はまともな主人公となりえることができるのか？  
気味悪がられずにヒロインに近づくことができるのか？

さてはて皆様。

「魔法少女リリカルなのは」の世界によつて。

## ぶろろーぐ2

とある時刻、とある家庭にて。

ハイハイをする子供が居た。

もとい物語の主人公、相馬<sup>そしうま</sup> 響<sup>ひびき</sup>である。

見た目は銀髪にオッドアイ。

彼の前世の生涯が閉じたのは中学2年。

まさしく厨二病に疾患してピークに当たる時期である。

そんな頃合に死んでしまった彼がそんな見た目になるのは当然のこととで、厨二病を脱する頃合。もとい7歳になる頃にはきつと自分の容姿に悶絶するだろう。「なぜあの時に、こんな奇抜な見た目を選択してしまったのだ!」と。

多分。きつと。おそらく。

してくれると良いな。

現在の彼は早速発情していた。

「……ふふふふ。俺の母親がよもやこんなに美人だとは……近

親相 げふんげふん。も、悪くは無い。

何、俺のイケメンを持つてすれば……」

ドンビキである。

生まれて数年で母親とのチヨメチヨメを考える人間。

あまりの非常識ぶりに本当に貴様、日本人か?と問いたくもなるのだが、自然界では親と子の交配は至極当然のようにあるし、血統的にも問題は無い。

別に良いのでは?という気もしてきたのは、あまりの思考回路ゆえに彼を人間としてではなくその辺の獣と同列視してしまっている

いうことなのだろう。一応反省しておこう。  
あれでも彼は人間なのだ。  
それはさておき。

「あら？おっぱいが欲しいのかしら？」

母親である相馬 文香ふみかに遠慮なくむしゃぶりつくところを見て戦慄  
しつつも思うのは、目が血走りすぎで怖いと言うことである。  
目が血走りながら乳房をしごきつつ吸い付く赤子。  
下手なホラーよりも怖い。

「……うますぎるっ！！！」

と吼えながらも母親の乳房にがつつく響。

全国の赤子や君のような子供を産んでしまった文香に謝ってあげた  
いほどにその姿は醜かったと言っておく。

これを見ても自然な笑みを絶やさないと母は母親は偉大である。

否、文香が偉大なのだろう。絶対。確実に。それしかない。

きつとそう思う。

そもそも彼の毛の色や目の色的にこれを我が子として愛せる彼女は  
まさに聖母と言えよう。

「……くっ……いかん、もはや眠くなってきた。」

今更であるが彼の言葉は全て「あー」とか「うー」とかである。赤  
ん坊なのだから当然のこと。

それを意識してお茶の間に届けているこの作業。

早くも苦痛と化してきたのだから気が滅入る。

そして彼はそのまま寝た。

寝る子はすくすく育つと言つがこのまま眠るように死んでくれたほうが世のため人のため。

何よりも罪の無い母親が救われるような気がする。

「ふふふ・・・凄い旺盛な食欲ね。」

ちゃんと食べたのを見て安心したのか文香は満面の笑みを浮かべた。母親としては至極真つ当なセリフのだが、それが向けられた相手が彼となると複雑な気分である。

・・・ここに、ここに聖母があるきん。眩し過ぎて目が開けられないんじゃないあ・・・

せめて彼女の元で彼が真つ当な道を歩めるよう、祈るしかるまい。

余談ではあるが母子家庭で父親は蒸発済み。

あまり良い人ではなかったそうなの。

## ぶろろーぐ2（後書き）

全体的にブローグは短いです。

なぜかあまりネタが思い浮かばないもので・・・先のほう先のほう  
はガンガン思いついているのですが。

よって、ちゃっちゃと進めることにしました。

## ぶらぶら〜くま (前書き)

これにてプロローグは終了。

### ぶるるーぐ3

子が育つのは早いと言うが、それを証明するがごとく、あつという間に9歳となった響が居た。

彼が通うこの小学校にはヒロイン候補がいる。

言わずもがな、高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスである。

もちろんのこと彼は煙たがられた。

なぜかと言えば単純明快。

変態でキモイからだ。

さらに言えば残念ながら厨二病は治らなかった。

「やあ、アリサ、すずか、なのは。」

「お、おはよう・・・」

「・・・響君・・・おはよう。」

「いい加減殺したくなってきたわ。」

にこやかな響の挨拶になのは、すずか、アリサはげんなりとして応える。

いや、アリサは応えてなかった。いや、これはきつとアリサ流の返答なのだろう。

いいぞ、もつとやれ!!

大丈夫。ちよつとただだから。ちよつと殺すだけだから。

今なら一万円上げるから。ね、ちよつとそこの人気の無いところに連れてってさ。

こっ、サクつとね？

「今日も可愛いね。」

「あ、ありがとう。」

「そ、そうでもないよ」

「・・・そんなことどうでもいいからとっとどっか行ってくれな  
い？」

なぜここまで彼が嫌われているかと言うとそれは彼の目線の目線  
である。

簡潔に言うところ。エロい。

人間というのは鈍く見えても意外と敏感で、たとえば目の前で起  
こっているように相手が下心を持って近づいてくればもちろんのこ  
と分かる。

目線で、もろバレなのだ。

じろじろと撫で回すような視線。

変態じゃない彼女達にとつてそれは酷く不快感を与えるものだった。  
そうした下心を隠せる巧妙な男もいるが、こちらほど性質が悪くな  
いのが唯一の救いである。

「ていうか、あんたどうしていつもいつも私たちのところに来るの  
よ。毎回言ってるでしょ！寄ってくるなって！！」

「ふっ、野に咲く可憐な花を見に来てしまうのは、美しき蝶の宿命  
な。」

「はあ？」

ぷくっ・・・くくく・・・美しき蝶ね？

宿命とか・・・ぷはっ！！

失礼。つい失笑してしまったのだが、次の問題がコレである。

これまた簡潔に言うならば意味が分からないことを言っているという  
ことだ。

思い出して欲しい。

彼女達は9歳児である。

そんな気障な話をされたところで彼女達の脳内では「野に咲く花に蝶が寄ってくるのは当然のことだよな」というそのままの字面で受けとっている。  
すなわち。

「この話の流れでいきなり蝶の話されても意味が分からないんだけど？」

「おや？わからなかったのかい？」

ふふふ、初心な子羊ちゃん達だ。」

「ああ？」

アンタバカにしてんの？」

「あ、いや、そうではなくてだ。これは野に咲く可憐な花を君たちに例えてー！ーぶるはっ!？」

「あ、アリサちゃん。さすがに殴るのは・・・」

「いいからいいから、ほら、とつとと行きましょ。」

「ぐふっ・・・ツンデレか。現実のツンデレとはかくもシンドイものなのだな。」

こうして彼の勘違いは増えていくのだった。

というか、もっとやってくれないだろうか？

もっと熱くなれよ!!

どうしてそこで去っちゃうんだ!!

あとちょっとで殺せるんだぞ!!

もっともっともっと熱くなれよ!!

あ、良い忘れたが彼の口調にも問題はある。

何よりも致命的なのが彼のその勘違いスキルにあった。

彼が煙たがられているにも関わらず接触を持つとするのは、別に嫌われていることに興奮する性質を持っているわけではない。

ただたんに恥ずかしがっている、素直になれていないだけと考えているからである。

すなわち。

嫌われているのにも関わらずしつこく空気の読めない人間がこれまたしつこく話しかけてくる。

非常に嫌な出来事と言えよう。

そして、そんな彼の行動はとある結果をもたらした。

「てめえ、いい加減にしろよ！なのは達が嫌がってるだろっ！？」

「何を言う？」

君こそ彼女たちを開放したまえ。きっと君が脅しているのだろ？」

「はあ、はあああっ！？」

そう、新たな転生者による苦情である。

彼は原作非介入派であり下心を持たず、なんやかんやでなのは達に気に入られた転生オリ主。

なのは達に日々無自覚な嫌がらせをしつづける響に対して文句を言いに来たのだ。

なのは達がなんだかんだで響を退け切れないのは彼が生理的に嫌いでも悪人では無いということに起因する。

相手に悪気が無く、なんだかんだで直接的で決定的な害が無いために特別お人よしな彼女たちとしては彼を退け切ることは出来なかったのだ。

そんな中立ち上がったのが、チートオリ主の彼、山田君（仮称）だ。

個人情報保護法のため、この場では仮名を使っている。

彼はいたって普通の両親の元に生まれ、原作怖いとか良いつつも都合展開によつてなぜかなのは達と近い展開になったという背景を持つ。正直此方のほうが我らがバカな主人公よりも腹ただしい気がする。

原作介入したくないとか言っておいて、どうせがつつり介入するんでしょ？

フェイトの母親に「なんでフェイトを娘と見てやらないんだ!!」  
みたいな熱血な説教するんでしょ？

どの口で原作に介入しないとか言うのか。

いや、それこそが主人公体質と呼べるものなのかもしれない。

残念ながら響にはそれが無いようである。

そしてなぜか「名前で・・・なのはって呼んで!」みたいなフラグを立てつつも現在、響にとっては程遠いチートハーレムを形成しつつある山田君。

今回の案件も彼の好感度はうなぎ登りで、響の好感度は格段に下がることとなるだろう。

山田君はきつと「かませ犬ありがてえ」などと思っているに違いない。

と言ったら彼は怒ってこういうだろう。

「ただあいつらの笑顔が曇るのが見過ごせないだけだ!!」

はいはい。主人公やってますねえ。

無欲アピールとか要らないです。

「は、話が通じねえ。」

「まあ君の気持ちも分かる。」

だがね。彼女たちが迷惑してるのは歴然たる事実であって——

「いや、だからオマエの行動が……」

その後、結局平行線のまま話は終わった。

そんなある日のこと。

彼の勘違いが解ける日がようやく来たのである。

発端は放課後。

彼のチートの一つにおっぱいチートと呼ばれるものがある。

彼が求めたチートで恐らく未来永劫誰も望まないであろうチートだ。そのチート内容とはおっぱいを自由自在に操ることにある。

色々語りたいのは山々であるが、それは後の機会に譲るとして、話を進める。

そう。

あるうことか彼はなのはのー幼女の胸を揉みしだいたのだった。そこに至るまでの経緯はあまりに見つともなく、しようもなく見ていられなかつたので省くが年頃　とまでは行かないが女の子が胸をイキナリーーそれも嫌いな男に揉まれたらどうだろうか？  
もちろん怒る。

下手をすれば精神的な傷。もといトラウマも与えかねない。

彼はそんな致命的かつ最低なミスを犯してしまったのである。

もちろん彼は無理やり揉むなどと言う外道ではない。

勘違い野郎ではあるものの、よくも悪くも日本人なのである。

悪人ではないし、そんなことを考えたことも無く、むしろ女性関係に関しては何心なくらいである。

歯の浮いたセリフを吐けるのも、彼女たちがまだ小さく、幼女だからであり、忘れているかもしれないが記憶を持ったまま転生した彼にとっては娘のようなー歳の離れた妹のようなもの。

なんだかんだで別に欲情していたわけではない。  
というか当然のことである。

しかしーいや、それがゆえに悲劇が起こった。

彼の認識ではあくまでも好かれていっていると思っっている。

なおかつ、自分よりもはるかに年下のーもとい今はまだ子供としてしか見てない、なのは。

彼は善意で将来的に胸が大きくなるようにチートを発動させておこうと思ったのだが、それが良くなかったのである。

とても身勝手に自己中心的な善意。

すなわちありがた迷惑は無常な現実として彼の身に迫った。

大問題となったのである。

まだ二次成長も迎えてないとはいえ女の子の胸をがつり揉みしだいたことで親御さんにも伝わり、もちろん彼の母親の文香にも伝わった。

なのはなのはで号泣。

先生にも伝わったし、すずかやアリサは完全に軽蔑する眼差しをむけるようになり、彼の一切合切を無視。

なのはなのはしばらくの休校の後、復帰。

彼を避けるようにはなったものの、なんとか立ち直ったようである。

もちろんクラスのほかの子にも伝わり、あらゆる場面へと彼の行動の結果が伝播した。

虐めを心配した文香が転校を薦め、響も転校を望んだ。

そう。

彼の勘違いは1人の女の子を泣かせてようやく解けるほどに重症だったのである。

もちろんのこと、彼は嘆いた。

泣きながらに謝った。

許してもらおうだとかそんなことは微塵も考えず、ただただ申し訳なきで一杯でひたすらに謝った。

もちろんなのはの父親や他家族はそれで許せるはずも無いが、子供のやることとして許したと言うことになった。そうしたはじめを付け。

彼はなのは達が通う学校を後にした。

彼の後姿はまるで別人のようだったという。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1936z/>

---

おっばいをチートさせる男

2011年12月8日01時02分発行